

ベアテ・シロタ・ゴードン
NWEC アーカイブ資料受贈記念研究会

福田 明美

1 はじめに

ベアテ・シロタ・ゴードン (Beate Sirota Gordon) 氏は、GHQ 民政局員として日本国憲法草案作成に携わり、日本国憲法第14条「法の下での平等」、第24条「両性の平等の原則」の条文の草案を作成したことで知られている。

国立女性教育会館（以下、「NWEC」）は、2019年にベアテ氏の長女であるニコール・A・ゴードン (Nicole Ann Gordon) 氏から、ベアテ氏の資料のうち日本に関するものをNWEC 女性アーカイブセンターへ寄贈いただいた¹⁾。

今般、NWEC はニコール氏より母ベアテ氏が残した124点の追加資料を受贈した。ベアテ氏は1952年28歳の時に当時59歳だった市川房枝氏の2ヵ月間の全米視察旅行の通訳を務めており、その際の市川氏の活動やエピソード、また当時のアメリカ社会の様子を記録している。

この新しい資料の受贈を記念して、戦前から女性参政権運動を展開した市川氏とベアテ氏の接点や足跡をたどり、ジェンダー平等を目指す現代の私たちに通じる課題やNWECの女性アーカイブ資料活用について議論する研究会を日本女性学習財団と共催したので報告する。

2 ベアテ・シロタ・ゴードン

NWECアーカイブ資料受贈記念 研究会

研究会プログラム

【開催日時】 2024 年 6 月 21 日（金）14：00～16：00

【会場】 東京都港区芝公園 2-6-8 日本女子会館 5 階
日本女性学習財団 Space We learn カンファレンスルーム

【方法】 対面開催（日英逐次通訳あり）

【登壇者】 パネリスト

ニコール・A・ゴードン氏

野村浩子 日本女性学習財団理事長

萩原なつ子 国立女性教育会館理事長

NWEC アーカイブ紹介

赤坂恵理子 国立女性教育会館情報課長

閉会の辞

村松泰子 前日本女性学習財団理事長・東京学芸大学名誉
教授

【出席者】 ベアテ氏または市川房枝氏にゆかりのある方々

登壇者発言と意見交換

■ニコール・A・ゴードン氏の発言

NWECは女性関連資料の保存に加えて教育という重要な活動をしていることから、私と弟は母ベアテの資料をNWECへ寄贈することを決めた。母の残したものが大切に扱われ、また真摯に見てもらえる場所を見つけられたということで私は非常に安堵を覚えている。寄贈資料には、母と市川氏がアメリカを旅した時に母が父ジョセフに宛てた手紙も含まれている。アメリカ人でない市川氏と母ベアテの2人の目を通したアメリカ社会が事細かに記さ

れており、市川氏の精力的な活動状況に加えて女性団体の抗議行動や不条理な人種差別など、当時の社会情勢も伺い知ることができる。

母が憲法に関わったことについて長い間口を閉ざしていた理由は2つあり、1つは日本国憲法草案へのアメリカの関与は極秘情報だったということ、もう1つは若く弁護士資格もない自分が関わったということで日本国憲法が過小評価されるのではないかと懸念である。

アメリカへ帰国後、母はアメリカ政府の委員会から「アフガニスタン憲法あるいはイラン憲法に女性の何を盛りこむべきか」について証言を求められたことがあった。

母は「それを聞きたければ日本の女性を招待しなさい。日本の女性は日本の憲法ができる前、できた後の生き証人ですから」と語った。その様子を見ていた私は、思慮分別のある母の態度に深く感銘を受けたことを思い出す。

母は母なりのやり方でアクティビストだった。母の晩年、死の床に伏して話すことも難しい状態のときに朝日新聞社から母への取材依頼が入った。母は当時の日本に、平和条項や男女平等の条項の改憲議論が起きていたことを深く憂い、平和について、そして女性の権利について気力を振り絞って語った。結果的にこれが母にとって最後の公的な発言となった。

ところで、私たちがこれらの資料をアーカイブする目的はどこにあるのか。良かったことを広げるには、また悪かったことを避けるにはどうすればいいのかを歴史から学ぶことである。戦争経験者がわずかとなった今、すべての世代は過去の教訓を学び直さなければならない。

今回の寄贈資料にある母が記した市川氏に関する記録から「大きな社会変革を起こすには勇気が必要だ。それがなければ何も成し遂げられない」ということを教えられた。これは、私たちがロールモデルを持つことがいかに大切かということの証である。

どこを見ても女性が半分以上を占めているこの世界において、現代のどの国や地域においても未だ女性が平等を勝ち取れていないということに、私は驚きを禁じ得ない。とりわけ現在のそして未来の若い世代には、日本国憲法

において女性の権利がどのように形成されていったのか、日本の歴史、そして女性の権利を巡る戦いについて学んでほしい。そのためには厳格な研究と分析、権力者を含めて誰かに伝える能力、倫理的で人間的な視点、そして適切な方法で行動を起こす勇気が必要である。

人々の記憶は非常に短い。「Those who forget the past are doomed to repeat it. (過去を忘れるものは過去を繰り返す運命にある)」という言葉があることを申し添える。

■野村浩子日本女性学習財団理事長の発言

市川房枝氏の評伝を昨年出したのは、1986年の男女雇用機会均等法施行の背景に国連の女性差別撤廃条約批准に向けて国内世論を盛り上げ政府を動かした市川氏の存在を知ったからだ。市川氏亡き後40年以上経つが、働く女性の歴史の中でその功績を再評価したいという思いに加えて、ジェンダー・ギャップ指数世界118位という低位に沈む日本のジェンダー平等社会の実現に向けて市川氏から学べるのではないかと考えた。

この評伝を書くにあたって市川氏に関する様々な資料、特に直筆の資料に接したとき、それらから熱い思いや息づかいまで感じられて興奮した。アメリカ視察中、行く先々で市川氏が感銘を受け、驚き、心を動かされた様子を記したベアテ氏の「すごく嬉しかった」とのメモから、何とか市川氏の役に立ちたいと思っている気持ち、または共鳴し合う雰囲気まで伝わってくる。

さて、市川氏が米国滞在中の1923年に出会い「婦人選挙権運動に注力せよ」との助言を与えた女性参政権獲得活動の牽引者であったアリス・ポール氏は、市川氏のロールモデルと言えよう。1970年、77歳になった市川氏が86歳のアリス・ポール氏をワシントンに訪ねた際に日本国憲法の英訳を手渡したところ、「日本の憲法は素晴らしい、特に男女平等のくだりは。アメリカの憲法改正のために一緒に運動してもらえないか」と言われたエピソードが残っている。ベアテ氏が作ったその日本国憲法はそういう形で巡り巡ってアメリカの女性運動家のお手本になったのは感慨深い。しかし、市川氏はベアテ氏が憲法草案に関わっていたということを知らないまま1981年に亡くなった。

アーカイブ資料に接することで時代の空気を感じ、私たちはそれらによって掻き立てられ、励まされる。今回ニコールさん寄贈品に含まれる私的な手紙は、ベアテ氏が何を感じたのかが書かれている非常に貴重なものである。

ニコールさんの言葉から、私たちはまだ市川氏やベアテ氏からいただいた宿題を果たしていないことに気づかされる。私もベアテ氏、市川氏、赤松良子氏らの長い列に並んで、ジェンダー平等に向けた社会の動きを作っていきたい。

■出席者の意見・感想

ベアテ氏自身が日本国憲法の草案に関わったことを1993年まで明かさなかった点について、出席者からは「ベアテ氏は憲法 24条が日本の女性たちにどのような影響を与えたかを確かめたかっただろう」「半世紀もの間、語るができずにさぞかし辛かっただろう」「女性だから、外国人だから事実を公表できなかったと聞いて残念に思う」等の感想が寄せられた。

この感想を受けてニコール氏から「母は自身が起草した女性や子どもに関する条文の一部しか日本国憲法に含められないことを知り、日本女性の味方は自分しかいないとの思いから上司に条文削除の撤回を泣いて訴えたが叶わなかった。母の議論・主張は正しく真実をついていると思うため、その時の様子を想像すると残念でならない。母は退職後に年に2～3回の頻度で訪日し『日本国憲法を大切にしてください』とその価値を語りながら、各地で日本女性たちと交流することで自分が力づけられると楽しみにしていた。もしも私の母がここにいたとしたなら、今日の集まりを非常に誇りに思い、そして頼もしく感じると思う」との言葉があった。

青木玲子NWEC元客員研究員からは「アーカイブこそが事実を語る」「NWECのアーカイブセンターは、日本の女性運動に関する基礎的な資料を保有するだけでなく、次世代が学び続けるための積極活用を目指して作られたもの」というNWECアーカイブセンター設立時からの理念に加えて2019年のニコール氏からベアテ氏の資料の受贈経緯をお話いただいた。

江刺昭子元NWEC女性アーカイブ資料選定委員からは「NWECのアーカ

イブセンターの認知度は高くない。その価値をもっとアピールする努力をするべきではないか」とのご意見をいただいた。

萩原なつ子国立女性教育会館理事長は「私は1993年5月、飯田橋にあった東京女性情報センターで、ベアテ氏が初めて『自分が憲法の草案作成に携わった』ことを話された講演会参加者のひとりである。斜め前の席には赤松良子氏もいらした。参加者の多くがベアテ氏の告白を聞きながら『この方がいたから私たち日本の女性が本当に人になった』と涙を流していた。それくらい衝撃的な出来事であった」と語った。

■閉会の辞 村松泰子 前日本女性学習財団理事長・東京学芸大学名誉教授

本日私たちがここに集ったのは市川氏とベアテ氏がいたからこそであり、歴史の中で動いていた人たちが会場内に蘇ったように感じた。日本の女性運動は100年の歴史を持つ。それは様々な組織の連携、シスターフッドなどが積み重ねられてきた歴史であるとの思いを馳せる時間でもあった。市川氏から続く長い列をさらに幅広く長く繋げていくために、引き続きNWECと当財団の連携をしていきたい。

3 おわりに

ベアテ氏が再来日した敗戦後間もない日本には約20万人の連合国兵士が駐留していたが、そのうち女性は60人、約3300人の男性に女性1人の割合であった。日本政府はもとより男性が意思決定を行う政治環境下において、ごくわずかしかなかった女性であるベアテ氏の日本女性に対するまなざしや憲法制定時の経過を生々しく記した資料は非常に貴重なものである。市川氏やベアテ氏の残した記録から、市川氏が熱い思いを抱えながらも冷静に戦略を立案し、女性だけでなく男性も、さらに国内外の団体などの周囲を巻き込んでいく様子が目に浮かぶ。

歴史的なアーカイブ資料は私たちを瞬時にその時代に運んでくれ、先人ら

の苦悩・挫折・喜びなどを雄弁に語りかける。これらアーカイブ資料を手がかりにした過去の出来事に解釈を加えることで得られる識見は、私たちがこれから進むべき道への手引きとなる。

NWEC 女性アーカイブセンターは、女性教育や男女共同参画施策等に関わった全国的な女性団体や女性に関する史資料を収集し、体系的に整理して保存・公開する重要な役割を果たしている。資料は寄贈元別に資料群としてまとめてあり、「資料群 40」として「ベアテ・シロタ・ゴードン資料」がある。その中にはベアテ氏の子供時代、GHQ 時代、日本全国での講演写真や憲法に関する資料のほか、1952 年に市川房枝さんと訪米した際の写真や日程表、手紙もある。当時のアメリカの新聞記事、「Suffrage leader here from Japan」も所蔵しており、当該記事には通訳を務めたベアテさんについても書かれている。また女性デジタルアーカイブシステムにて、目録と著作権や個人情報などで問題ないデジタル画像を WEB 公開している。本研究会でいただいたご意見を踏まえ、今後も引き続きより多くの方にアーカイブ資料をご活用いただけるよう工夫を重ねていきたい。

注

- 1) 展示会期中に開催された「男女共同参画推進フォーラム」のニコール氏の講演には、かつてベアテ氏に励まされた方々を中心に、全国各地からの来場者が800名を超えた。寄贈された資料は、女性デジタルアーカイブシステムにて2022年2月より全目録(1,237件)と一部画像を公開している。詳しくは(森 2020)を参照されたい。

参考文献

- オーストリア文化フォーラム東京 2023 『FROM VIENNA TO TOKYO
ウィーンから東京へ (ベアテ・シロタ・ゴードン 女性の権利のために闘ったヒロインの旅)』 オーストリア文化フォーラム東京
- ベアテ・シロタ・ゴードン、平岡磨紀子(構成・文) 2016 『1945年のクリス

Ⅲ NWEC 実践報告

マス』朝日新聞出版

市川房枝 1999 『市川房枝 私の履歴書ほか』日本図書センター

森 未知 2020 「「ベアテ・シロタ・ゴードン展～日本国憲法に男女平等の思いを込めて～」と今後の展開」『NWEC実践研究』第10号:158-171 国立女性教育会館

野村浩子 2023 『市川房枝、そこから続く「長い列」』亜紀書房

謝辞

本セミナーを共催いただいた公益財団法人日本女性学習財団の皆様並びに研究会にご出席いただいた方々に心より感謝申し上げます。

(ふくだ・あけみ 国立女性教育会館研究国際室専門職員)